

名工の伯樂① レオン・ジュリー

明治という時代を織物の産地、西陣の転換期ととらえ、産業の発展を支えた人々についてのべてきたが、今回を含めて三回は、そうした胎動を外部からもたらした人物について記しておきたい。

今回はその中で京都府仏語学校の教師であったレオン・ジュリーを取り上げる。

医学博士でクリミア戦争に従軍したこともあるジュリーは、文久二年、幕府が函館に病院を建てようとしたとき、医師として招かれたが、その計画が中止となり翌年、長崎領事となつている。その後、同地の洋学研究所である広運館教師を経て、明治四年に二百五十弗の俸給で京都府に招かれている。欧米の文化を移入し、新たな人材を養成しようとする京都府の要請にこたえ、ジュリーは独人レーマン、米人ボードウィンとともに



に教育に力を尽した。

なかでもジュリーは、それだけにとどまらず、京都府の推進する殖産にも助言者としての役割を果たしている。

あの佐倉常七、井上伊兵衛、吉田忠七の仏国派遣にあたって、仲介者となっているし、明治十年、自ら帰国の時には、京都府の産業発展のために組織的な技術研修の必要性を説き、八名の優秀生徒に留学の道を拓いている。そのなかに、近藤徳太郎、稲畑勝太郎、今西直次郎がいた。彼らは機械、染色、撚糸について学理と技術を修め、西陣に新たな息吹をそそいだのである。西陣の産業革命を背後から支えたといえよう。

京都府とジュリーの契約内容には、「語学ノ外当局下ノ為ニナルベキ事ヲ、京都府庁有司ヨリ相談ニ及ブ時ハ、詳悉ニ答論シ、其事ヲ補助スルベキ事」とあり興味深い。

洋式工業化を強力に進める京都府は、ジュリーを重用したと思われるが、ジュリーの京都への思い入れもなみなみならぬものがある。それは、おそらく美術工芸の中心地京都に、自らの故国パリーの面影をみただらう。